

まんだら通信

第251号(通巻285号)

平成29年06月 西暦2017年 佛誕2576年 皇紀2583年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



ある日のお釈迦さま

初めてお釈迦さまの跡を訪ねてインドに行くようになって、もう三十年以上になります。

着くのは日本時間なら夜中になります。空港から街に出ると薄暗い中に舞い上がる埃と独特の匂いと、むっとする暑さに、幾度訪ねてもああインドに来たんだという実感が湧いてきます。

最初の時は、豊山派の人たちの仲間に入れてもらったのですが、引率してくださった栗山秀純先生はデリーの大学に留学した学者さんでもあり、ずいぶん勉強

させて戴きました。

その旅行の時、「四月過ぎて、西のラジャスタン州からの風が吹き始めると、日本では想像できないほど暑くなると、たとえば本を読んでいて、顔を動かすと動かしただけのほつべたが熱いんです」とおっしゃっていたことを覚えています。やがて雨期になって、毎日雨が降るようになると漸く凌ぎやすくなって、みんな大喜びするそうです。

雨期を喜ぶのは人間だけではなく、動物も草木も一斉に元気を取り戻すのさうです。

お釈迦さまの時代、お弟子たちは八方に散り、夜は村外れのお堂や樹の下などで瞑想をして自分の心を鍛え、夜明けになると托鉢してその日の食事を終えたあと、お百姓、鍛冶屋さん、王様、遊女、大臣など、分け隔てなく、聞き手に一番分かりやすい言い方で、お釈迦さまの教えを説いて歩きました。

ただ、雨期の三ヶ月間は遊行(外での修行)をやめて大きなお堂、たとえば竹林精舎や、平家物語でも知られている祇園精舎に集まってお経の読み方や復習をしたり、座禅をしたりと修行を続けました。これは、昆虫や小動物、草木などを、過って踏みつけて殺生するといけないからと、お釈迦さまがお決めたことになった規則(律)で、『雨安居』とか『夏安居』といっています。

そんな或る日のこと、薄暗いお堂の窓際で繕い物をしている年老いた修行僧が、針穴に糸が通せず大変に困っていた時、後ろを通りかかったお坊さんが、「これどれ貸してご覧。」と難な

く通してくれました。

お礼を言おうと、ヒョイと振り返るとそれはお釈迦さまでした。

「尊いお方に、このようなことをさせて申し訳ないことです。」と、ただただ恐縮する修行僧に「私だって、人並みに功德を積みたいのだよ」とお答えになったという話が伝わっています。このエピソードを伝えた人たちも、お釈迦さまの、相手を思いやる暖かいお心がよほど印象深かったのでしょう。

いつも周りから「あなたが一番」と言われ続けると、大抵の人は『偉く』なって、尊大な態度になってしまふもので、身の回りにもそのような人は沢山いますし、私自身そうなのを、自分だけが分からないのかも知れないと、時々考えるようにしているのですが…。

お年が八十歳という、その頃のインドでは稀なご長寿になって「私は年老いて、革ひもなどで繕いながら、やつと動いている牛車のようなものなんだよ」と、永年おそばに付き従って来たアーナンダ尊者におっしゃり、今はもう征服されてなくなつてしまった、ご自分の生まれ故郷であるカピラヴァストウ(カピラ城)に向かって最後の旅に出られた時、お涅槃の地クシナガラにほど近いカシアで、金属の装身具作りを生業とする、鋳り職人のチュンダ(漢訳で純陀)のご供養の食事が原因で激しい下痢に悩まされます。

このご病気がもとでお亡くなりになるのですが、この時チュンダの気持ちを感じて、いつもおそばに近くにいるアーナンダ尊者にお告げになりました。

「アーナンダよ、よく聞きなさい。人は言うかも知れない。チュンダが毒を差し上げたから世尊は亡くなられたと。しかし、それは間違いなのだよ、アーナンダ。チュンダの供養はブッダへの、この世での最後の供養として記憶にとどめるべきもので、

最初の供養をしたあの村娘のスジャータと同じように、稀に見る、較べるもののない大きな功德を積んだのだから、誉れとすべきものであると、チュンダにもそのように伝えなさい。布施の功德は、何にも増して尊いものであると付け加えることも忘れずに。」と。お経と聞くと、退屈でただ眠くなるだけのように思いますが、八万四千もあるというお経の中には、このように感動的なお話も沢山あります。



を日本に送る時壊れないように、間に詰めたものだったのですね。向こうではどこにでも沢山ある、牧草だった訳ですね。同じように、日本からあちらに陶磁器を輸出する時、浮世絵を詰め草にして送ったそうです。浮世絵など観賞に値しないというほど、邪険に扱われていたということですね。

聞いた話では、この時の浮世絵がきっかけになって、フランスでは印象派に発展したと聞いたことがあります。

2017.06.09 龍渉

余滴

▼上の写真は、この辺りでは何の変哲もない、ありふれた新緑に見えます。毎日、何かに追い立てられるように過ごしていると、益々気持ちにゆとりがなくなった行くように思えてなりません。でも、ふと立ち止まってこういう景色に触れると、何故かホッとして心が穏やかになります。

▼今月はシロツメクサ。【マメ科シャジクソウ属】ずいぶん長い間、ツメクサの意味が全く分からず、いつも気になっていました。ある時、『ツメクサって詰め草のことだと分かって、な〜んだ』と疑問が解けて拍子抜けした覚えがあります。

ヨーロッパから、ガラス器など

につぼん人情小噺
第五十三話 ねえさん

最近、地方に出かけることが多いのですが、九州の宮崎で、ある三十年代後半の女性からこんな話をうかがいましたので、ご紹介いたします。

その女性を仮に、光代さんとしましようか。

光代さんは、三年前にお父さんの武夫さん(仮名)を亡くされました。

お父さんは元地方公務員で、定年になつて五年後、突然、脑梗塞で倒れたそうです。これから趣味の農作業でもしながら余生を送るつもりで、シルバライフをととても楽しみにしていたそうなので、さぞ残念だったのではないかと思います。その時、光代さんには、気がかりなことがひとつありました。

それは、お父さんがいつも口にしていた「ねえさん」のことでした。

「光代、私が今日、こうして幸福に暮らせるのは、ねえさんのおかげなんだ」

それがお父さんの、晩酌をするときの口癖でした。

「ねえさんって、誰？」

「ああ、定年になつたら会いに行くつもりだから、その時に紹介するさ。お前もいつしよに行くか」そう言っていたお父さんが突然亡くなつてしまつたので、光代さんは「ねえさん」のことが気になつてしかたがなかつたのです。

葬儀も無事に終わり、親戚が集まつて食事がはじまつた時、光代さんはお母さんに聞いてみました。

「ねえ、お母さん、お父さんかいつも口にしてた『ねえさん』って今日、来てる？」

「私も知らないんだよ、誰なんだろうね」

光代さんは、親戚のおじさんたちにビールを注ぎながら、聞いてみました。

「ああ、それは和子(仮名)ねえさんのことじゃろう。ほら、武ちゃんの一番上の兄貴のお嫁さんじゃ。もう年で、足腰が弱くてな、葬式には来れなんだが、知らせ聞いて、泣いとつた。自分の亭主も死んだばかりやからな」

それから三年たつた今年二月、光代さんは父親が口癖のように言っていた「ねえさん」に会いに行つたのです。それが自分を育ててくれたお父さんへの恩返しだと思つたからでした。

「ねえさん」は、同じ宮崎県内でもかなり辺鄙な山の中の集落で、ひとりで暮らしていました。

「あんたが武ちゃんの娘さんかいね。大変じゃつたらう、こんな山の中まで」

杖をつきながら、「ねえさん」は光代さんを土間まで迎えに出てくれました。

その晩、光代さんは「ねえさん」の話を知りました。そして、お父さんが感謝している理由がようやくわかつたのです。

「ねえさん」は、信州の生まれで、人の紹介で、この宮崎の山の中の農家に嫁ぎました。結婚するまで、相手の顔も家庭環境もまったく知らないまま、親の言いなりで山村にやつてきたのです。

待ち構えていた家族を見て驚きました。なにしろ、病気がちの両親、結婚相手であるかなり年上の長男、そして、その下に十人の子供がいたからです。

「あなたのお父さん、武ちゃんは下から四番目、まだ小学生じゃつた」

着いた夜に祝言をあげ、「ねえさん」は、翌日から畑仕事。毎朝四時に起き、朝ご飯の準備から子供たちのお弁当づくり。食事の後片付けが終われば、暗くなるまで、畑仕事。

昼ごはんの時にものすごい量の洗濯をしたそうです。その時、「ねえさん」は二

十二歳だつたと言います。

「その時、武ちゃんがよう私の手伝いをしてくれました。水を汲んでくれたりね。それに、武ちゃんは勉強ができてねえ……」

家は農家だから、学校の成績なんかどうでもいい。子供たちは中学校を出たら、次々と大阪に働きに行つた。いよいよ武ちゃんも働きに出ようということになつた時、「ねえさん」が夫にこう進言したんだそうです。

「これからは時代が変わる。武ちゃんは勉強ができる。なんとか高校に行かせてあげて」

『ねえさん』の説得に夫も折れ、農協で借金をして、学費を捻出することにしたそうです。

しかし、入学試験は合格し、学費は納入したものの、制服を買うお金がありません。「ねえさん」は、農作業の姿のまま、風呂敷包みを手にも、武ちゃんと山を降り、バスに長い時間揺られながら、町に出ました。そして、古着屋を見つけたと、武ちゃんの手を引くように入つていき、風呂敷包みのなかの自分の着物と古い制服を交換したのでした。

嫁入り道具として、信州から持つてきた、まだ袖も通していない新品の着物です。

「着物は一生着ることもないからね。古着屋さんもいい人だなあ、事情を話したら、涙を目にいつぱいためてな、『いいよ、いいよ』って。あなたのお父ちゃん、学生服がとでもよく似合つてねえ。」

『ねえさん、僕、一所懸命勉強するよ』つて、白い歯を見せてねえ。私に約束してくれたように、武ちゃん、それから町の高校に行つて、働きながら大学まで出たのよなあ。立派だつたよ、あなたのお父ちゃんは」

光代さんの目も潤みはじめました。

そして、かつてアルバムで見た若い頃の父親の姿が目につかびました。

「おばちゃん、父が大変にお世話になりました。ありがとうございます」

その晩、ふたりは夜更けまで、「武ちゃん」のことを語り合いました。

そして、光代さんは、今年のお彼岸に父の墓前でこう報告してきたそうです。

「お父さんの代わりに、『ねえさん』にお礼を言つてきました。『ねえさん』も武ちゃんのこと、とても褒めていましたよ。よくがんばつたねえつて。よかつたね、お父さん。今度は私がお礼を言う番。私を育ててくれて、本当にありがとうございます」

あそか基金のこと

紫雲寺では、スリランカの子供たちのために奨学金を持っています。

この基金はもう二十年余りになります。が、管理しているのは、スリランカのお坊さんモットウネ・アンギラサさんで、来日中の先日、お忙しい予定を遣り繰つて一泊して行きました。

「今では、大学を終えて公務員になつた子が四人もおり、小学生から大学在学の毎月受け取っている奨学生は、多分百人ぐらいいるだろうと思います。お陰様で、奨学生の家族や近所など含めて日本大好きなスリランカ人が増えて、嬉しい限りです。」

という、こちらまで嬉しくなる話をして下さいました。